おおがわらの先人集 志を未来に繋ぐ

―先人を知り、先人に学ぶ―

国際化が進むなかで、将来大河原町の子どもたちも、世界規模で活躍する機会が増えてくるかもしれません。そんなとき、子どもたちが将来、大河原町で生まれ育ったことに誇りをもち、自信をもって交流活動をしてほしい。そのためには、現在の豊かな大河原町を築き上げた先人たちを子どもたちに知ってもらい、先人たちから様々なことを学んでほしいという願いから、この度大河原町教育委員会では「おおがわらの先人集　志を未来に繋ぐ」を発刊しました。制作には、大河原町教育委員会関係者を始めとした町内小中学校の教諭が携わり、情報収集から原稿執筆、監修までを手掛けています。

先人たちの努力の積み重ねやたくさんの汗を流し何かを成し遂げようとする生きかたは、子どもたちのみならず、大人にとっても悩んだり壁にぶつかったとき、集団や社会のなかで自分が果たすべき役割の、大きなヒントを与えてくれるかもしれません。

今回発刊された内容は、大河原町の発展に尽くした人のなかから、19人が採り上げられています。ここでは、そのなかから3人について紹介します。

「一目千本桜」生みの親
高山 開治郎

開治郎は、明治9（1876）年に江戸時代から続く由緒ある旅館の長男として大河原の地で生まれました。

明治24（1891）年、開治郎が15歳のとき父親が亡くなってしまい、これまで続いてきた旅館を廃業しなければならなくなり、開治郎はふるさとを離れて東京に働きに出ました。これまで何不自由なく暮らしていた開治郎にとって、東京での下働きをする日々はとてもつらく厳しいものでした。いく度となくふるさとの宮城に帰ることを夢見、なつかしい景色を思い浮かべていましたが、当時東京から大河原町まで帰るのには二日がかりとなり、休みを取れるわけもなく、何よりも高い切符代を払うゆとりなど開治郎にはありませんでした。

大河原を離れて30数年、開治郎は苦難を乗り越え、立派な実業家へと成長をとげました。

そんなとき、たびたび氾濫していた白石川の改修工事が完成することを知った開治郎は、「今こそ、ふるさとへ恩返しをするときだ」との思いから、何か心に残るものをと考え、大正12（1923）年と昭和2（1927）年の2回に分けて、合計約1200本もの桜の苗木をふるさと大河原町へ植えました。当時のお金で4000円（今の約2000万円）あまりのお金を、町のために差し出したのでした。昭和8（1933）年、町はその栄誉をたたえて、白石川のほとりに「桜樹碑」を建てました。

開治郎は、昭和17（1942）年66歳でこの世を去りました。桜の寿命も約60～70年と言われていますが、今もなお開治郎の思いが地域の人々に受け継がれ、「一目千本桜」として毎年きれいな花を咲かせ、人々に希望と笑顔を与えてくれています。

「尾形橋」と呼ばれるほど橋の架け替えに貢献した人
尾形 安平

安平は天保3（1832）年、高山家の次男として生まれましたが、生まれて間もなく、大河原村の地主兼酒造業を営んでいた尾形家の養子となりました。

今から約140年前、明治5（1872）年に日本で初めて新橋―横浜間で鉄道が開通しました。それから7年後、明治12（1879）年に、東北にも鉄道を伸ばす計画があるという話を聞きつけた安平は、詳しい話を聞こうと10日以上もかけて東京に向かいました。安平は、10日以上もかけてやってきた東京に、鉄道ならば12時間で行けるという事実を目の当たりにし、「大河原の発展のためには、鉄道の力が必要だ、大河原に停車場をつくらなければならない」と心に誓いました。

当初鉄道会社の計画は、大河原を通らない計画となっていました。鉄道会社の株を買い、土地が準備できれば停車場の設置も可能であると聞いた安平は、地元の有力者をまわり、必死に頭を下げて協力を求めました。安平の熱心さに感銘を受けた有力者たちは、協力を申し出、協力者を得た安平は、鉄道会社の株を買い、白石から岩沼の間の停車場を大河原にするという約束を取り付けたのでした。

その後安平は、大河原村から停車場のある大谷村へ引っ越し、付近の町づくりを進めました。明治16（1883）年には、大河原村と大谷村を結んでいた橋の架け替えを行いました。「開運橋」と名付けられた橋は、後に彼の功績をたたえ、「尾形橋」と呼ばれるようになりました。

明治20（1887）年に待望の東北本線が開通し、大河原駅が営業を開始しました。大河原駅は今もなお、たくさんの人に利用され、仙南地域の中心として発展を続ける大河原に大きく貢献しています。

無医村「金ケ瀬村」で村人の命を守った名女医
松山 京子

昭和24（1949）年、それまで医者のいなかった金ケ瀬村に初めてのお医者さんが来ました。病気になると、大河原町まで行かなければならなかった金ケ瀬村の住民にとっては、待ち望んだお医者さんでした。それから、49年間89歳になるまでずっと地域住民の命を守ってくれたお医者さん、それが松山京子先生です。

松山先生は、明治39（1906）年に三重県の名賀郡で生まれました。女学校時代には教師を目指していましたが、父親の説得で東京医学専門学校、現在の東京女子医科大学に進学しました。卒業後は、医療関係の仕事を数か所経て、終戦を大河原町で迎えました。

終戦の年の暮れ、帰る家もなく疎開先の大河原町小山田で診療所を開き、昭和23（1948）年の暮れには、無医村だった金ケ瀬村の村長から要望を受け、翌年3月に「松山医院」を開きました。

それから先生は、いつも地域住民の健康を思い、村で伝染病が広まったときは、まず村の人々に教育しなければならないと、夜に村の各地区を訪問し講話をしたり、「赤痢」という病気が流行したときも、金ケ瀬小学校の体育館を病室にして、大勢の患者の命を救いました。金ケ瀬小・中学校の校医となってからは「子どもたちを病気から守らなくてはならない」という一心で、バランスの良い食事について、子どもたちとその親に分かりやすく話して聞かせました。

地域の人々の健康を守るために、一生懸命だった松山先生。先生への感謝の気持ちは、今も多くの人々の心のなかに生き続けています。

先人集について知りたいときは…

ここでご紹介したのは、先人集に採り上げられているごく一部の内容となります。

この他どんな人たちが採り上げられているのか、興味をもたれたかたや購入を希望されるかたは、教育委員会へお問い合わせ下さい。

㊐教育総務課　☎53-2742